様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２年　５月　１０日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００７～２００９
課題番号：１９７２００６２
研究課題名（和文）　イギリス演劇におけるリアリティ構築と観客反応に関する研究

研究課題名（英文）　The Study of Reality Construction and Audience Response in British Drama

研究代表者 中村　未樹（NAKAMURA MIKI）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：００３２４８７２

研究成果の概要（和文）：この研究はイギリス演劇におけるリアリティ構築の過程を観客反応の観点から考察することを目的とした。研究対象としては特にルネサンス期の演劇作品を扱い、当時の舞台慣習や演劇観を参照しながら調査を行った。この時代の舞台における表象がいかに観客を引き付け、現実的なものとして彼らに認知されるかという問題について、主に、視覚的な側面と演技論の側面において検討し、特に演技に基づく現実性の構築が１６世紀末において重要になっていくことを立証した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the way in which the English stage achieved the effect of real with reference to audience response. It mainly covered English Renaissance drama and also paid attention to stage conventions and ideas of theatre at that time. Especially, this study focused on visual effects and the acting styles and considered the problem of audiences' engagement and cognition of reality at theatre then. My study proved that the reality effect on stage at the end of the sixteenth century had to do with the actor's performance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	５００，０００	０	５００，０００
２００８年度	３００，０００	９０，０００	３９０，０００
２００９年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	１３００，０００	２４０，０００	１５４０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：シェイクスピア、イギリス演劇、リアリティ、観客反応、観客、劇場、ルネサンス、演劇性

１．研究開始当初の背景

演劇研究においては、一般的に、演劇を読む作品、つまり「テキスト」として捉える立場と、舞台において演じられるもの、つまり「パフォーマンス」として捉える立場の二つが方法が存在する。本研究を開始する前までの私の研究は前者に属するものであり、新歴史主義の立場からウィリアム・シェイクスピ

アの劇作品と当時の文化・社会状況との関連性を考察していた。しかし、演劇作品を「テキスト」としてのみ扱った場合、看過してしまう問題が幾つか存在している。まず、演劇を小説や詩など他の文学形式と区別する大きな違いは、現実の舞台空間で上演されるということであり、意味生成の状況は小説などの場合とは大きく異なっている。また、シェイクスピアの時代の劇作品には観客を意識した台詞が沢山うかがえるのであり、劇作家たちは観客の受容を踏まえながら劇を制作していたと考えられる。つまり、観客に対する効果という点が劇作術において一つの懸案すべき項目になっていたと思われるのである。これらの問題について考察したいと考えたことが本研究の動機の一つとなっている。

パフォーマンス研究については、イギリス・アメリカにおいては古くからの伝統があり、劇場の構造、あるいは観客の受容など様々な上演の側面に関する先行研究が存在している。国内においては、笹山隆先生の観客反応と受容に関する御著書が出版されて以来、上演に関する研究が数多く出されている。しかし、近年においては多文化主義やポストコロニアリズム、あるいは上演手法に関する研究が主に行われており、観客の反応の具体的様相に関する調査はあまり行われてはいないと思われた。このような状況を踏まえた上で、本研究においては、特に観客反応を焦点とするパフォーマンス研究を新たに試みたいと考えた。

また、演劇におけるリアリティの問題については、国内では、喜志哲雄先生の御著書において扱われて以降、十分には議論されていないと見受けられた。ギリシア演劇の時代より、演劇は現実との関連において議論されており、この関係性はルネサンス期から現代にいたるまでの演劇においても重要な問題となっている。さらには、演劇以外の様々なメディアが登場した２１世紀の今日において、リアリティをめぐる意識は大きく変化している。このようなリアリティをめぐる意識とその形成の技法の変遷の模様について、近年におけるリアリティに関する研究を参照しながら、歴史的観点から考察していきたいと考えた。

上記のような動機により、本研究では、観客反応及び演劇におけるリアリティの問題に焦点を当てたパフォーマンス研究に、これまでの新歴史主義的手法を接ぎ木して、より多層的な演劇研究を試みることを意図した。

２．研究の目的

本研究では、イギリス演劇史における三つの時代、つまりエリザベス朝、王政復古期、１９世紀の演劇作品を取り上げ、それぞれの時代における観客の受容の状況と、作品が構築するリアリティの特徴を明らかにし、最終的にそのリアリティが当時の社会におけるリアリティをめぐる認識とどのように関係しているかを新歴史主義的手法によって解明することを当初の目的とした。これまでの研究において取り扱ってきたシェイクスピアの演劇作品の特性をイギリス演劇の通時的展開において再考するため、また、各時代における演劇を媒体とした「リアリティ」の特徴と差異を浮き彫りにするため、このような対象設定を行った。

各年においては、シェイクスピアの喜劇、１７世紀の風習喜劇、そして１９世紀の喜劇を扱う予定とした。各時代の作品において、いかなる劇作術によってリアリティが構築されていくか、その際観客反応がどのように関与しているか、また、観客の意識の状況はどのような経過を辿るかについて考察することを目的とした。

この作品分析を行うための準備段階として、演劇作品のリアリティについて、これまでの先行研究を踏まえつつ最近の理論を参照することで新たな概念枠を構築していくこと、そして、各時代の上演状況についての基礎知識を習得することを目指した。

三ヵ年における作業を通じて、それぞれの時代の演劇作品におけるリアリティの特性を明らかにし、その差異と変化の歴史的意義を通時的観点から検討していくことを目標とした。

３．研究の方法

各年度とも、まず、演劇その他のメディアにおけるリアリティに関する理論を扱った先行研究を調査、収集、分析して、リアリティをめぐる概念枠を作成するための作業を行った。また、当時の英国における劇場の状況、観客の構成状況と様相などに関しても調査を進め、当時の演劇をめぐる環境について俯瞰的な見取図を作成していく作業も進めた。以上の基礎的作業を継続して進めながら、各年度においては、いくつかのテーマを設定した上で先行研究の収集、調査を行い、論文の作成を行った。

１９年度においては英国の大英図書館において一次資料の収集を行い、特に１６世紀末に登場した演技形式であるパーソネーションについての記録を調査した。また、１９年度、２０年度においては、研究の途中経過を国内の学会において口頭発表することで、その内容の確認と修正を行った。２１年度においては、これまでの研究結果をさらに検討するため、イギリスのシェイクスピア学会（於　ロンドン大学キングズ・カレッジ）のパフォーマンス・ワークショップに参加し、出席者たちと意見交換を行った。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

各年度の研究成果について以下に記載する。

①平成１９年度

i)妖精や悪魔、亡霊など、劇の虚構の世界においては不可視とされている登場人物が舞台上でどのように再現前化されているかについて、道徳劇及びエリザベス朝のいくつかの演劇作品を取り上げて考察し、主に、舞台の物理的状況、演出方法、及び観客の意識という三つの要素の相互作用によって再現の在り方が決定されていることを明らかにした。

ii)ルネサンス演劇における自己言及性の問題を特に観客反応の観点から考察した。中世の道徳劇、トマス・キッドの復讐悲劇、シェイクスピアのロマンス劇という異なる時代の三つの演劇作品を取り上げ、通時的分析を行った。時代の経過とともに、自己言及性の様式が変容していくことを指摘した。

iii)『アントニーとクレオパトラ』においてシェイクスピアが当時イタリアから流入した建築理論を参考にして劇を執筆したと仮定した上で、劇作家が建築の比喩を用いながらどのように政治の世界をリアルに描き出しているかについて考察した。その途中成果は、日本シェイクスピア協会主催の第４６回シェイクスピア学会のセミナー、「『アントニーとクレオパトラ』を読む」において口頭発表を行った。

②平成２０年度

i)ルネサンス演劇における実体性・現実性、そして虚構性という相反する二つの側面の相互作用に関して、同時代の演劇・演技に関する議論を参照しながら考察し、その途中成果として、日本シェイクスピア協会主催の第４７回シェイクスピア学会において口頭発表を行った。

ii)ルネサンス期の演劇作品においては、登場人物が悲嘆の台詞を述べる際に舞台に座り込むという所作が多く見受けられる。このような悲嘆を示す形式的演技が同時代の劇場においてどのような観客反応を生起させるかについて、当時の演技論および現代の観客反応論などを参照しながら考察した。

iii)シェイクスピアの歴史劇作品における宗教の問題と同時代の政治状況の関連性について分析した研究書であるJean-Christophe Mayerの*Shakespeare's Hybrid Faith: History, Religion and the Stage* についての書評発表を関西シェイクスピア研究会９月例会で行った。

③平成２１年度

i)ルネサンス演劇における実体性・現実性と虚構性の相互作用をめぐる問題について、昨年度のシェイクスピア学会における口頭発表においてフロアから頂いた意見を参考にしながらさらにその内容を推敲し 'Body, Personation and the True Imitation in *The Spanish Tragedy*, *A Midsummer Night's Dream* and *1 Henry IV*'と題する論文を作成した。

ii)ルネサンス演劇における悲嘆の所作について、昨年度に引き続き、同時代の形式的演技と内面性の表象に関する問題を参照しながら考察した。(その成果は、「エリザベス朝における悲嘆の所作と内面性について」という題目で平成２２年４月２５日の関西シェイクスピア研究会（於　大阪大学）において発表している。)

iii)シェイクスピア作品の異文化における翻案とそのリアリティの問題について、国立文楽劇場で上演された文楽版『テンペスト』を対象として考察し、その一つの成果となる劇評は日本シェイクスピア協会の機関誌 *Shakespeare Studies* 第４７巻に掲載された。

iv)イギリス演劇におけるリアリティ構築と観客反応の問題について、これまでの研究結果を確認かつ検討するため、イギリスのシェイクスピア学会の第４回学会(於 ロンドン大学キングズ・カレッジ)に出席し、ワークショップ 'Shakespeare in Performance'に参加して意見交換を行い、パフォーマンス研究の現状を確認した。

v)イギリス国王ヘンリー四世の従来の評価に関して修正を試みた著作であるIan Mortimerの*Fears of Henry IV: The Life of Self-Made King*についての書評発表を関西シェイクスピア研究会６月例会（於　同志社大学）で行った。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

１の「研究開始当初の背景」の箇所において説明したように、近年のシェイクスピア学界において実践されているパフォーマンス研究は、主に多文化主義やポストコロニアリズムの立場に基づいており、観客の意識や受容状況、及びリアリティに焦点を当てた分析はあまり試みられていない。その点において、本研究はこの領域におけるパフォーマンス批評の新たな試みとなったと考えられる。その一つの証拠として、先述した平成２０年のシェイクスピア学会における口頭発表では、フロアの先生方より、伝統的な観客反応論に基づきながらその新たな可能性を探った試みであるとのコメントを幾つか頂いた。

また、国外におけるシェイクスピア研究の

近年の情勢を見ると、1980 年代より始まった新歴史主義などのいわゆる社会的・文化的文脈の中で演劇の意義を探る手法を経た上で、それ以前に試みられていた観客反応と受容の研究を新たに歴史化された視点から実践しようとする動きがうかがえる。その点において、本研究はこのようなシェイクスピア研究の最近の流れに属するものとしての意義を有すると考えられる。

（３）今後の展望

今回、科学研究費補助金の交付を受けた三年間においては、イギリス演劇史における三つの異なる時代を扱った通時的研究を当初行う予定であったが、調査を進めていく上で、それ以前の中世演劇におけるリアリティの調査が必要となり、その分析を試みた。また、ルネサンス期の演劇におけるリアリティの問題に関しても取り組むべき課題が予想以上に出てきたため、結果としては中世及びルネサンス期の時代のみを研究対象として扱うことになった。そのため、予定していた、近世以降の時代の演劇作品については調査することができなかったため、今後はこの領域について、今回の研究成果を踏まえた上で調査していくことが課題となる。

実際、本研究の成果として確認された、演技に基づく現実性という点に関しては１７世紀以降においてさらに重要な問題になっていくと考えられるため、本研究における分析結果を土台として、また、同様の手法を援用することで、ルネサンス以降の時代の演劇における現実性についても調査していくことが可能になると思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①Miki Nakamura、‘Body, Personation and the True Imitation in *The Spanish Tragedy*, *A Midsummer Night's Dream* and *1 Henry IV*’ 、『英米研究』（大阪大学英米学会）、査読無、３４、２０１０、２５－４８

②Miki Nakamura、‘*Tempest Arashi Nochi Hare—Sunshine After the Storm*, an adaptation of Shakespeare's *The Tempest* ’、*Shakespeare Studies*、査読有、４７、２０１０、５６－５８

③Miki Nakamura、‘Review, Jean-Christophe Mayer, *Shakespeare's Hybrid Faith: History, Religion and the Stage*’、*Studies in English Literatur*e、査読有、５０、２００９、１４３－１４９

〔学会発表〕（計　２件）

①中村未樹、「ルネサンス演劇における演技と現実性」、第４７回シェイクスピア学会、２００８年１０月１１日、岩手県立大学

②中村未樹、「『アントニーとクレオパトラ』における建築とローマ」、第４６回シェイクスピア学会　セミナー『アントニーとクレオパトラ』を読む、２００７年１０月７日、早稲田大学

〔図書〕（計　２件）

①Mutsumu Takikawa, Masae Kawatsu, Tomoyuki Tanaka 編、*Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University*、音羽書房鶴見書店、２００９年、５５５ページ、Miki Nakamura 、 ‘The Representation of Invisibility on the English Renaissance Stage’（１２５－１３７ページ）

②大島久雄　編、『『テンペスト』受容研究：テキストと言説とインターテキスチャリティ』、コロニー印刷、２００８年、１２８ページ、中村未樹、「自己言及性と観客反応―『マンカインド』、『スペインの悲劇』、そして『テンペスト』」（３６－４５ページ）

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　未樹（NAKAMURA MIKI）

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：００３２４８７２